高等学校における通級による指導の円滑な実施に関する実践的研究
－通級指導担当教員の語りをもとにした理解啓発リーフレット、安心スタートガイドの作成－

特別支援教育研修課　主任指導主事兼課長　赤井　育代
指導主事　千歳　　歓
指導主事　三上　　惇
指導主事　弦牧　研太
指導主事　田中　辰弥

キーワード：　**高等学校における通級による指導**[1)]　**通級指導担当　不安　孤立　連携**

１　問題と目的

近年、全国的に、小・中学校における通級による指導を受ける児童生徒が増加している。本県においても、7,120 人に上り（**図１**）、その卒業生の約半数が公立高等学校に進学している。小・中学校からの通級による指導の学びの連続性の確保が求められ、本県においては平成 30 年４月の制度改正と同時に、高等学校９校から通級による指導を開始している。令和７年度には拠点校 22 校、巡回校 26 校に拡充し、先進県として注目を集めている（兵庫県教育委員会,2025）。

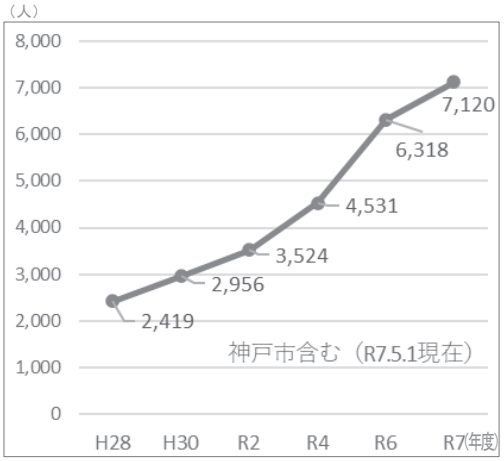


図１　県内小中学校における通級による指導対象児童生徒数

一方、教職課程での特別支援教育科目必修化（H31.4 施行,教育職員免許法及び同法施行規則改正）以前に高等学校教員になった教員は、特別支援教育について学ぶ機会が少ない中で通級指導担当教員（以下「通級指導担当」という。）となり、特別支援教育の専門性の向上とともに校内の理解啓発が求められる。丹野傑史（2021）は、通級指導担当の指導力向上に焦点を当て研修の検討を行ったが、生徒の実態把握の難しさとともに、通級指導担当の孤独感が大きな問題であるとしている。しかし高等学校における通級による指導に関する研究や報告は未だ十分に実施されておらず、今後の蓄積が重要な課題となっている（斎藤彩,2024）。さらに矢島聡一・奥住秀之（2023）は、高等学校においては、管理職や教員の特別支援教育及び通級による指導に関する意識が醸成されておらず、特別支援教育に関する校内体制が脆弱であるとしている。円滑な通級による指導の実施に向けては通級指導担当のみならず、校内におけるすべての教職員の理解と協力が不可欠である。

そこで本研究では、高等学校において、はじめて通級による指導を担当する教員の不安や悩みを明らかにし、①″すべての教職員で支える″高等学校における通級による指導のためのリーフレット（以下「リーフレット」という。）を作成するとともに、②「はじめての通級指導担当教員のための『安心スタートガイド』」（Web 掲載型ガイド）（以下「ガイド」という。）を作成する。そのことにより、高等学校における通級による指導への理解啓発及び通級指導担当の専門性の向上を図ることを目的とした。

２　研究方法

インタビュー調査及び座談会による質的調査とした。インタビュー調査は、事前に用意した質問項目をもとに半構造化面接法を用いて行い、対象者の語りに応じて柔軟に質問内容を

深めることとした。座談会は、テーマを設定し、通級指導担当が複数名集まり、テーマをもとに自由に意見交換を行う形式で実施した。

(1)　インタビュー調査

ア　目的

はじめて通級による指導を担当する教員が抱えている課題について明らかにする。

イ　対象

県内の今年度はじめて通級指導担当になった高等学校教員　２名

ウ　時期

令和７年７月～８月（各１回）

エ　質問項目

インタビュー調査にて、**表１**の４つの質問を中心に行うこととした。

さらに、必要に応じて「対象生徒の実態」「実態把握の方法」「担任や教科担当等の他の教員との連携」「環境づくり」等について質問していくこととした。

表１　質問項目

①	通級指導担当になった経緯
②	通級指導担当になって困ったことや悩んだこと
③	他の教員からの理解や協力、連携、校内支援体制について
④	生徒の実態把握のために工夫していること

(2)　座談会

ア　目的

通級指導担当の経験をもとに、校内における他の教員からの協力や理解に関する悩みを明らかにし、体制づくりや校内理解啓発に向けた具体的な工夫や方法を探る。

イ　対象

通級指導担当７名とし、経験年数は**表２**に示す。

表２　対象者の通級による指導担当経験年数と人数

経験年数	人数
１年目	２人
５年目	３人
７年目以上	２人

ウ　時期

令和７年 12 月（１回、90 分）

エ　座談会のテーマ

設定したテーマに沿って、自由に意見交換を行うこととした。テーマを**表３**に示す。

表３　座談会のテーマ

①	はじめて通級指導担当になったときの悩みと、その解決方法
②	校内における他の教員の協力や理解について

指導主事は進行役として参加し、話題が本研究の目的から逸脱しないよう配慮しながら意見交換を促した。通級指導担当１年目の教員には、現在苦労していることや困っていること等について語ってもらい、経験豊かな教員には、はじめて通級指導担当になった当時のことを振り返り、戸惑いや困ったこと、それらをどのように解決していったかを語ってもらった。さらに校内において、他の教員に協力してほしいこと、してもらって嬉しかったこと等を意見交換することとした。

(3)　手続き、分析方法

各調査での語りを逐語録に起こし、通級による指導に関する理解不足の実態、担当当初に生じやすい困難、支援がうまく機能した要因等について内容を整理した。

次に、語りの中から共通して見られる経験や認識を抽出し、「理解啓発に必要な視点」と「通級指導担当への支援に必要な視点」という二つの軸で分類した。

(4)　倫理的配慮

調査対象者には、研究の目的及び内容を説明し、得られた発言内容は研究目的のみに使用し、個人及び所属校が特定されない形で整理し、公表することを明示した。

調査への参加は任意とし、参加しないことによる不利益が生じないことを説明した上で実施した。あわせて、インタビュー調査及び座談会において、対象者に過度な心理的負担が生じないよう十分な配慮を行う等、倫理的観点に留意して調査を進めた。

３　結果

本研究では、通級指導担当への個別インタビュー調査及び座談会の記録を分析し、その内容をカテゴリー化して整理した。以下では、(1)インタビュー調査、(2)座談会の結果を分けて示す。

(1)　インタビュー調査

インタビュー調査内容を分析した結果、通級指導担当の不安への語りは、主に【対象生徒の捉え方と通級による指導につながる経路】【実態把握の困難さと手探りの工夫】【中心課題・目標設定に関する迷い】【指導内容の試行錯誤と柔軟な対応】【担当者としての不安と支え】の５つのカテゴリーに整理された。

ア　【対象生徒の捉え方と通級による指導につながる経路】

「担任が生徒の様子を見ていて、困っている様子があったので担任から通級による指導を紹介した」という語りから、学校生活における担任の生徒の困りへの気付きが、生徒が通級による指導を受けようとする契機となっていることが示された。また通級指導担当が発達障害等のある生徒が通級による指導の対象であることを説明しつつも、「不安や苦手を克服するための学びの場」であることの強調等、説明の仕方を工夫している様子もあった。

イ　【実態把握における困難さと手探りの工夫】

中学校からの引継ぎ資料、授業参観、担任・教科担当からの聞き取り、本人・保護者との面談等によって、複数の情報を得て、実態把握を行っていた。しかし「何を重視すればよいのか分からない」「どのような質問をすれば実態把握につながるのか分からない」という戸惑いや不安な様子が共通して語られた。実態把握に１学期間を要する場合も多く、通級指導担当は試行錯誤を重ねながら生徒理解を深めている実態が見られた。

ウ　【中心課題・目標設定に関する迷い】

本人が感じている課題を尊重しつつも、「それをそのまま目標とするのではなく、専門的視点や他の教員による生徒理解から整理し直す必要性を感じた」と語られた。特に、本人・保護者の願いが一致しない場合や、本人が困りを言語化できない場合は、通級指導担当が迷いや不安を抱えながら目標を設定している様子も示された。また自己理解を促す学習により、互いに対話しながら目標を定めることが重視されていた。

エ　【指導内容の試行錯誤と柔軟な対応】

「各教科の課題提出への対応」「感情のコントロール」「コミュニケーションスキルの向上」等、生徒の困りに応じた内容が多く挙げられた。教材を、「Web 検索」「他校の通級指導担当に相談しながら探している」等の手段により作成している一方、これでよいのかという不安や迷いを抱えていた。また「生徒の悩み等の状況から予定した指導内容を変更する場合もあり、その日の生徒の状況を題材として取り上げることで、通級による指導への意欲が高まった。指導後、生徒の変容を担任と情報共有し、連携ができた」という語りから、指導計画の柔軟な変更が通級による指導にも有効であると捉えていた。

オ　【担当者としての不安と支え】

通級指導担当は、「何から始めてよいか分からない」「自分の指導に自信が持てない」といった不安を抱えていることが明らかとなった。一方で経験豊富な通級指導担当への相談

や、他校の実践を見学する機会等が大きな支えとなり、通級による指導への理解が深まる転機となっていることが語られた。

(2)　座談会

座談会の逐語録を分析した結果、【担当初期における強い戸惑い】【孤立感と他校通級指導担当仲間の存在による支え】【校内理解・管理職の理解とリーダーシップの影響】【指導観の変化と実践の深まり】【今後の体制への提案】の５つのカテゴリーに整理された。

ア　【担当初期における強い戸惑い】

はじめて通級指導担当になった際に、「何から始めてよいか分からない」「勉強する時間がない」「他校の情報が得られない」といった戸惑いが強く語られた。特に制度開始当初は、参考となる実践や資料が乏しく、手探りでのスタートを余儀なくされていた。

イ　【孤立感と他校通級指導担当仲間の存在による支え】

「相談できる人がいないことが最も辛かった」「一人で不安や悩みを抱え込んでしまった」という語りが多く見られた。一方で相談や助言をするための役割を担う協力校として位置付けられた特別支援学校の教員や近隣校の通級指導担当と研修等を通じて仲間としてつながることで、「一人ではない」と感じられたことが大きな支えとなっていた。

ウ　【校内理解・管理職の理解とリーダーシップの影響】

通級による指導が円滑に進むかどうかは、校内支援体制の構築が重要であり、管理職の理解やリーダーシップが影響することが語られた。管理職が制度の意義を理解し、通級指導担当を支える姿勢を示している学校では、校内連携が円滑に進みやすい。一方、理解が得られない場合には、担当業務との両立や分掌との兼ね合いで大きな負担が生じていた。

エ　【指導観の変化と実践の深まり】

通級による指導を続ける中で、「教科指導のように教科書がないことへの戸惑い」から、「生徒一人一人に合わせて考える指導」へと指導観が変化していく様子が語られた。自立活動の内容や実態把握の重要性に気付くことで、当初の不安が軽減され、指導に手応えを感じられるようになった経験も共有された。また生徒の変容により、通級指導担当の不安がやる気へと変わり、指導を行う動機が高まっている様子が見られた。

オ　【今後の体制への提案】

今後の通級による指導の在り方として、「通級指導担当を孤立させない体制づくり」「拠点校・巡回校それぞれに応じた校内支援体制」「経験者とはじめての通級指導担当が学び合える仕組」の必要性が提案された。通級による指導の実施校の増加に伴い、通級指導担当の育成と継続的な支援が不可欠であることが示された。

４　考察

(1)　リーフレット作成の意義とその内容

インタビュー調査及び座談会の結果から、高等学校における通級による指導は、制度としては整備されつつある一方で、とりわけ通級による指導を経験したことのない教員にとっては、その目的や具体的な役割が十分に理解されていない実態が明らかとなった。森太・吉利宗久（2024）は、導入期の校内体制整備について、整備過程には、校内教員からの質問と通級指導担当による回答というプロセスがあると述べており、通級指導担当が制度や実践の意義を繰り返し説明する必要に迫られている状況を示している。このことから、通級による指導を一部の専門教員が行う特別な取組としてではなく、学校全体で生徒の学びを支える仕組として位置付け直さなければならない。そのためには、高等学校において校

内の教員が気軽に手に取り、短時間で概要を理解できる媒体が起点となり、学校全体の通級による指導に対する理解啓発を進め、それにより生徒の学びを支える仕組の構築につなげることが必要であると考える。

以上を踏まえ、本研究で作成したリーフレットは、インタビュー調査及び座談会の結果をもとに、通級による指導を受けることで生徒がどのように変容するかの具体的な指導例や通級指導担当と連携した指導・支援、通級指導担当の一日の予定等を示すことにより、通級による指導の理解啓発を図る内容とした。

また本リーフレットは、制度への心理的なハードルを下げ、担任や教科担当等の理解の導入として機能することを意図したものである。

(2)　ガイドの必要性

通級指導担当は、実践上の具体的な不安や悩みを抱えていることが本研究から明らかとなった。特に実態把握の視点、中心課題や目標の設定、指導内容の選定等において、何を基準に判断すればよいのか分からないという戸惑いが共通して見られた。

こうしたことから、リーフレットのみでは、通級指導担当の実践上の課題に十分に応えることは難しく、はじめての通級指導担当のためのより詳細で具体的な支援資料が必要であると考えられる。

本研究で作成した Web 掲載型のガイドは、スライド形式とすることで、必要な部分を必要なタイミングで参照できる利点を持ち、通級指導担当が一人で抱え込みがちな悩みに対して、実践の道筋を示す役割を果たすことが期待される。

高等学校におけるはじめての通級指導担当教員のための「安心スタートガイドガイド」
（2026.3 当総合教育センターWeb 掲載）

(3)　通級指導担当を担任のよき相談相手として位置付ける意義

通級による指導の円滑な実施のためには、通級指導担当が専門的な指導者であると同時に、担任や教科担当のよき相談相手として機能することが重要であることが示唆された。担任が生徒の困りに気付き、通級指導担当に相談できる関係性であれば、支援は通級による指導の時間に留まらず、授業や学級経営へと広がっていく様子が語られていた。この点において、本リーフレット及びガイドは、通級指導担当を「支援を一手に担う存在」として描くのではなく、「学校全体をつなぐ役割」として位置付けることを重視した。この描き方は、通級指導担当の孤立を防ぎ、校内連携を促進する上で有効であると考えられる。

(4)　教育委員会による資料作成の意義

森・吉利（2024）は、校内体制の整備を円滑に進めるためには，通級による指導の導入が現在の各高等学校の取組等にいかなる影響があるのかを明らかにすること、自校にとって望ましい校内体制を模索するために学校の状況を共通理解することの重要性を述べている。このことから、通級による指導に関する課題は個々の学校や教員の努力だけでは解決が難しく、教育委員会が実態を把握した上で共通の支援ツールを提示することには大きな意義があると考えられる。リーフレットとガイドを役割の異なる二つの媒体として作成したことは、対象や目的に応じた支援を可能にし、校内体制の整備を段階的に支える取組として有効であると考えられる。

５　本研究の課題と今後の展開

本研究には、以下の課題が残されている。

第一に、作成したリーフレット及びガイドの効果検証が挙げられる。実際に学校現場で活用した際に、校内連携にどのような変化が生じたのかを、教員の理解や行動の変容をアンケートや追跡調査等を通して明らかにすることが求められる。

第二に、通級指導担当の継続的な育成と支援体制の構築である。経験の有無にかかわらず学び合える仕組や、相談できるネットワークづくりを行政としてどのように支えていくかが、今後の重要な課題である。

謝辞

本研究の実施及び本稿の作成にあたり、県内の高等学校において通級による指導を担当されている先生方に、貴重なお時間を割いてインタビュー調査及び座談会に御協力いただきましたこと、心から感謝申し上げます。日々の実践の中で感じておられる悩みや工夫、率直なお考えを丁寧にお話しいただいたことは、本研究におけるリーフレット及びガイドの作成にあたり、大きな示唆を与えてくださいました。

また本研究を進めるにあたり、神戸大学名誉教授　鳥居　深雪 先生、ならびに兵庫教育大学大学院教授　岡村　章司 先生から、専門的かつ示唆に富む御助言を賜りました。通級による指導の意義や在り方、研究の視点に関して多くの御教示をいただいたことに、深く感謝申し上げます。

あわせて、本研究の趣旨を御理解いただき、調査及び資料作成に御協力くださった関係各位に厚く御礼申し上げます。本研究が、高等学校における通級による指導の理解促進と実践の充実に寄与する一助となれば幸いです。

注）

１）文部科学省（2018）高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 163－164.

「イ　障害のある生徒に対して，学校教育法施行規則第 140 条の規定に基づき，特別の教育課程を編成し，障害に応じた特別の指導（以下「通級による指導」という。）を行う場合には，学校教育法施行規則第 129 条の規定により定める現行の特別支援学校高等部学習指導要領第６章に示す自立活動の内容を参考とし，具体的な目標や内容を定め，指導を行うものとする。その際，通級による指導が効果的に行われるよう，各教科・科目等と通級による指導との関連を図るなど，教師間の連携に努めるものとする。」

文献

兵庫県教育委員会事務局特別支援教育課（2025）特別支援教育の推進.

森太・吉利宗久（2024）通級による指導の導入期における高校教員の質問と通級担当の説明― 校内体制の整備過程に関する実践報告 ―. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録，第 186 号，79-89.

斎藤彩（2024）高等学校における通級による指導に関する研究動向と展望. 人文科学研究，No.20，85－95.

丹野傑史（2021）通級による指導における自立活動の質的改善に向けた授業研修－Social Skill Training の自立活動としての捉え直し－. 長野大学紀要，第 43 巻第３号，33－39.

矢島聡一・奥住秀之（2023）高等学校の通級による指導におけるチームとしての学校を意識した生徒支援. 東京学芸大学紀要　総合教育科学系，第 75 集，185－193.

“すべての教職員で支える”
高等学校における通級による指導のためのリーフレット

生徒のことで、こんなお悩みはありませんか？

人前での発表やグループワークが苦手な生徒がいて

ずっとアドバイスしているのですが…
なかなかうまくいきません。

英単語を覚えることができない生徒がいて

ずっと英単語を繰り返し書いて
頑張っているのですが…
なかなか覚えられません。

課題提出が滞っている生徒がいて

ずっと提出するよう
声をかけているのですが…
なかなか改善が見られません。

よく友だちとトラブルになる生徒がいて

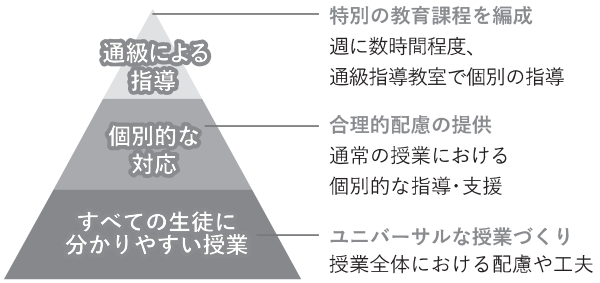
ずっと相談にのっているのですが…
なかなか改善が見られません。

＼当てはまるなら、生徒が「なりたい自分」に近づくために／

通級指導担当教員が生徒の学校生活を一緒にサポート。

CHECK 通級による指導とは？

通常の学級に在籍し、授業を受けながら、週に数時間程度、特別な指導の場（通級指導教室）で障害の状態等に応じた指導を受ける指導形態です。障害による特別の指導を、高等学校の教育課程に加え、又は、その一部に替えることができます。（特別の教育課程を編成します。）



通級による指導の事例

Case 01 課題の提出を忘れがちだった生徒 A が、スケジュールの管理ができるようになった例

指導前

生徒 A は、期限までに課題を提出できないことが多かったので、担任・教科担当とも困っていた。

指導後

自分でスケジュール管理ができるようになり、課題の提出を忘れなくなった。さらに、友だちとの約束も守れるようになり、トラブルが減ったことで自分に自信がついてきた。

通級による指導内容

①スケジュール管理の方法を生徒 A と一緒に考える。

②生徒 A はスマートフォンのアプリを使ってスケジュールを管理する方法を身に付ける。

Case 02 英単語を覚えることが苦手な生徒 B が、自分にあった学習方法を見つけられた例

指導前

生徒 B は、英単語を覚えることが苦手で、教科担当が教え方の工夫や手立てを探してい

指導後

自分に合った学習方法を身に付けて英単語を少しずつ覚えることができるようになった。

通級による指導内容

①どうすれば英単語を覚えられるのかを生徒 B と一緒に考える。

②生徒 B は、絵や写真を見れば言葉を結びつけることができるため、タブレット端末で絵や写真を見ながら英単語の学習を行う。

Case 03 人と関わることを避けていた生徒 C が、コミュニケーションをとることができるようになった例

指導前

生徒 C は、他者の表情を読み取り、相手の意図を理解したり、自分の考えを相手に正しく伝えたりすることが難しく、孤立傾向だったため、担任が心配していた。

指導後

相手の表情を見ながらのコミュニケーションを意識するようになり、クラスでも友だちと会話が続くことが増え、表情が明るくなった。

通級による指導内容

①どうすればうまく人と関わることができるかを生徒 C と一緒に考える。

②人の表情カードや写真から相手の表情を読み取るワークをする。

③他者とのコミュニケーションに関するロールプレイをする。

VOICE 通級による指導での学びについてのコメントをご紹介！

保護者の声

ストレスへの対処ができるようになったようです。

心のケアやストレス発散方法を学び、困難を感じたときのトレーニングを行ったと聞いています。集団でいるときの過敏さによる疲れを自分のバロメーターで捉え、ストレスへの対処ができるようになったようです。

生徒の声

自分の求めている援助を他者に伝えられるように。

これまで困った時に「助けてほしい」と言えなかったけれど、「自分だけではできないから一緒にやってほしい」と伝えられるようになりました。

担任の声

生徒のできることが増えた瞬間に立ち会える喜び。

通級による指導では、担任や教科担当だけでは対応が難しい課題にも専門的な支援が受けられます。生徒のできることが増えた瞬間に立ち会えることが嬉しく、通級指導担当教員は支援を共に考える心強い存在です。

通級指導担当教員と一緒に考えましょう！

通級による指導　３つのポイント

POINT 01
通級による指導を受けるかどうかの最終的な判断は生徒本人の希望が最優先

高等学校においては、障害の有無が明らかでない生徒も対象として考えられます。生徒・保護者のニーズも含め関係者による合意形成を図るための総合的な判断を組織的に行える仕組みが必要です。最終的な判断に当たっては、生徒の希望が最優先であり、心理的負担感などへの配慮も重要です。

POINT 02
指導に当たっては、個別の指導計画を作成して、通級による指導を行います。

個別の指導計画は、一人一人の指導目標、指導内容及び指導方法を明確にして、きめ細やかに指導するために作成するものです。通級による指導では、自己理解やコミュニケーションなどの力を育てます。目標は生徒と共に設定し、保護者とも連携して実態やニーズに応じて計画的に指導を進めます。

POINT 03
通級による指導は「自立活動」として単位認定されます。

個別の指導計画に従って通級による指導を履修し、その成果が個別に設定された目標からみて満足できると認められる場合には、当該高等学校の単位を修得したことを認定することになっています。通級による指導は「自立活動」として単位認定されます。

▶ 生徒が通級による指導を受けるメリットとは？

✓ 自己理解の学習を通して他者理解につながります。

生徒自身が得意なことや苦手なことを整理して自己理解を深めます。
自分の特性を知ることで他者との違いも理解し、互いを尊重する姿勢が育ちます。

✓ 自分に合った学習方法を知ることで、勉強することが楽しくなります。

自分の考え方や理解の仕方に気付き、自分に合った学び方を選べるようになることで、理解しやすくなり学習することが楽しくなります。

✓ ソーシャルスキルを身に付けることで、対人関係をスムーズにします。

コミュニケーションや対人関係で困難な場面を想定し、スムーズに生活を送ることができるよう話し方や行動の仕方等のスキルを身に付ける練習をします。

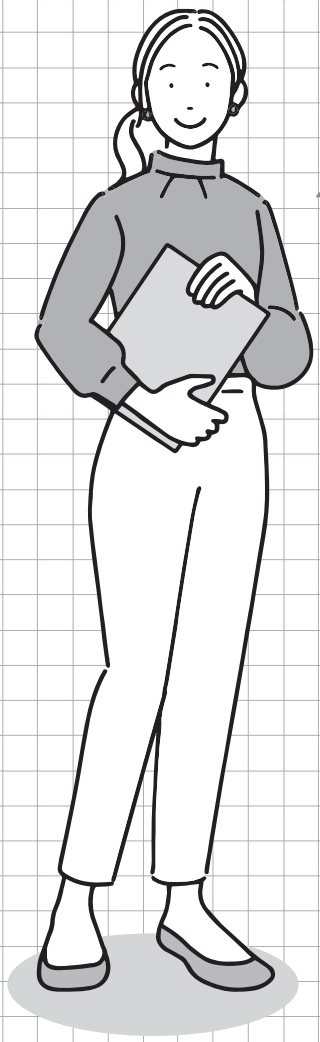
✓ 課題の提出等が困難な原因を分析し、提出できるように支援します。

「期日までに余裕を持って課題に取り組むにはどうすればよいか」等、通級指導担当教員と一緒に分析し、提出期限を細かく設定したり、チェック表を活用したりする等のスモールステップで支援し、段階的に提出までつなげます。

記憶の方法を確認している

期日までに提出できる方法を考えている

通級指導担当教員より



通級による指導は、配慮を必要とする生徒が必要な支援を受けながら学びを広げるための場です。その目的をすべての教職員で共有し、理解することが大切です。

まずは…**「一緒に考える」がキーワード。**

（1）通級による指導での学びを通常の学級でもいかすために、指導記録などの情報共有を行っています。

（2）担任が通級による指導を見学すると、生徒の見え方が変わり、より適切な支援につながります。

こんな風に連携しています

- 通級による指導の内容や記録を、担任・教科担当と共有する
- 通級指導担当教員が通常の学級の授業を見学し、普段の様子を把握する
- 担任・教科担当が通級の授業を見学し、支援のポイントを共有する
- 通級指導担当教員・担任・関係者で連絡会等を開き、情報共有と支援方針を検討する

通級指導担当教員のある一日※

午前
- 気になる生徒の観察
- 担任等との情報共有
- ケース会議の進行

午後

放課後
- １年生の通級による指導
- ２年生の通級による指導

※拠点校に所属していますが、巡回による指導も行っています。

障害の有無にかかわらず学校生活に適応しにくい生徒には、特別な指導・支援が必要です。

卒業後を見据えたスキル習得のため、通級による指導を受けることをご検討ください。

● 気になったら、まずはここから

・自分が受け持つ生徒に通級による指導が必要かな？と思ったら…
「高等学校における生徒の実態把握チェックシート」

・通級による指導についてもっと詳しく知りたい方は…
高等学校におけるはじめての通級指導担当教員のための「安心スタートガイド」

右記の二次元コードからアクセスできます。

このリーフレットの問合せ先

☎ 0795（42）3449

兵庫県立総合教育センター　特別支援教育研修課
〒673-1421　兵庫県加東市山国 2006-107

参考文献

卒業後を見据え、生徒に付けさせたい３つの力（鳥居 ,2020）
①アカデミックスキル：自立のために必要な読み書きなどの学力（教科の補習ではない）
②ソーシャルスキル：人とうまく関わっていくための基本的な技能（例：面接の受け方、報告・連絡・相談　等）
③アドボカシースキル：自分の得手不得手を知り（自己理解）、必要な場面でサポートを求めること（援助要請力）